

4) D期の成果

明治時代では暗渠が多数検出された。水との闘いの歴史の長さが感じられる。

以上、今回の大師東丹保遺跡の発掘調査によって得られた成果を述べてきた。今後、これらの成果をもとに調査・研究を進め、具体化していきたい。

2 山梨県における埴輪の出現と展開

今回の大師東丹保遺跡の調査では、県内では3例目となる壺形埴輪を伴う古墳が確認された。ここでは、本県における大師東丹保古墳の位置づけを行うための、準備作業の一步として県内における埴輪の出現と展開を捉えてみたい。

埴輪編年の研究は、昭和53(1978)年、川西宏幸の論文が発表されるに及んで、今日的研究の指針が示された(川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号)。このような状況の中で、昭和55(1980)年、橋本博文により本県の円筒埴輪の大綱が提示された(橋本博文 1978 「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』第8号)。この橋本の研究を受け、坂本美夫によっても検討が試みられている(坂本美夫 1981 「山梨県における五世紀後半代の埴輪」『甲斐考古』18-2)。

1) 埴輪の出現以前

埴輪出現以前の古墳としては笛吹川に沿う曾根丘陵上の小平沢古墳及び大丸山古墳があり、本県の出現期の古墳である。

小平沢古墳は県内唯一の前方後方墳で、全長約45mを測る。内部主体は木棺直葬か粘土槨と推定され、竪穴式石室が採用されていない点が注目される。葬送祭祀の形態は、後方部の墳頂よりS字状口縁台付甕の破片が検出されたのみで不明である。副葬品には勾玉の他、舶載斜縁二神二獣鏡1面があり、前方後方墳へのこの種の鏡の副葬は長野県弘法山古墳などの半肉彫り獣形鏡の副葬とあわせて前方後円墳体制に先行する現象ととらえられている。弘法山古墳とは埴輪を出土しない点でも共通する。

大丸山古墳は全長120m(ないし99m)の前方後円墳である。上部に竪穴式石室、下部に組合わせ式石棺をもつ内部主体の構造や三角縁神獣鏡をはじめとする副葬品などから畿内大和政権との強い結びつきがうかがえるが、埴輪は確認されていない。

これらの築造年代は、内部主体の構造および副葬品から小平沢古墳は4世紀中葉、大丸山古墳は4世紀後半と想定されている。

本県の出現期古墳が埴輪を樹立していないことは、甲府盆地南東部を形成する曾根丘陵上に分布し、この地に弥生時代終末に甲府盆地内で最も有力化した地域集団が形成したと考えられる上の正方形周溝墓群が存在し、これを在地の弥生時代から古墳時代にかけての社会発展の現象として評価されていることとは無関係ではないように思われる。

2) 初現期の埴輪

初現期の埴輪を出土する古墳は笛吹川水系の銚子塚古墳、岡・銚子塚古墳、丸山塚古墳、そして今回発見された富士川水系の大師東丹保古墳が挙げられる。

銚子塚古墳は本県で最初に埴輪を樹立した古墳でかつ全長169mを測る最大規模の前方後円墳である。内部主体は後円部中央に竪穴式石室があり、後円部が3段築成、前方部が2段築成の墳丘には葺石が施され、段築テラス上に埴輪が樹立されていたと考えられている。埴輪は器台形円筒埴輪、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪、冪形埴輪がある。円筒埴輪の外周調整は2次タテハケを基調とし、A種ヨコハケが僅かに認められ

る。突帯は総て張りつけで、M字状ないし台形の突出度の大きいものと小さいものを基調に、断面が三角形気味で先端が尖る突出度の大きいもの、突出面に刻み目の施されたものも見られる。透孔は巴形、三角形、方形などがあり、一段に3孔以上配置するらしいが、その組み合わせは明確でない。壺形埴輪は、二重口縁壺の形態であり、外面調整は2次タテハケを基調とし、肩部にヨコハケも見られる。透孔は三巴が口縁部に4、円ないし巴形が胴上部に2、小型の巴形が胴下部に1箇所それぞれ見られる。冑形埴輪は調整等は円筒埴輪に同じである。これらの埴輪は黒斑をもつ破片の存在から野焼による焼成といえる。

岡・銚子塚古墳は全長92mの前方後円墳である。内部主体は後円部墳頂に粘土槨があり、2段築成の墳丘には葺石が施され、周溝も確認されている。埴輪は器台形円筒埴輪、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪、器財埴輪がある。円筒埴輪は墳丘及び墳端に、器財埴輪は後円部墳丘上に樹立されていたものと思われる。円筒埴輪は外面調整は2次タテハケを基調とし、僅かに縦方向のナデやA種ヨコハケが見られる。突帯は断面M字状を呈する突出度の比較的高いものを基調に、断面が台形を呈するものも僅かに見られる。透孔は巴形、長方形、それに三角形と思われるものが存在する。一段の孔数は明確ではないが、配列の組み合わせは、巴形のは明確ではないが、長方形はそれだけの配列ではないかと思われる。朝顔形円筒埴輪は外面調整はナデだが部分的にハケメ痕が認められる。内面は綾線を境に上がヨコハケ、下が指頭によるナデがある。

器財埴輪はいずれも形態不明だが、断面三角形を呈する突帯を貼り付けたものや2本の突帯間に三角形と思われる沈線を描いたものがある。壺形埴輪は外面調整をヨコハケ、内面調整を指頭によるナデやオサエで部分的にヨコハケが見られる。透孔は巴形である。これらの埴輪は黒斑が見られ、野焼による焼成といえる。

丸山塚古墳は径72mの2段築成の円墳である。内部主体は墳頂部に竪穴式石室があり、一重する周溝が確認されているが、葺石は見られない。埴輪は器台形円筒埴輪、普通円筒埴輪、壺形埴輪がある。円筒埴輪の外面調整は2次タテハケを基調とし、内面調整はナデ・ヨコハケなどが見られる。突帯は断面M字状を呈する突出度の比較的高いものと断面台形を呈する突出度の比較的小さいものがある。透孔は巴形、三角形、方形などがあり、1段に3孔から4孔以上穿たれる。その組み合わせは同一種類のみが多いようである。器財埴輪は蓋と思われるものや凸帯を八の字状に貼り付けた形態の不明なものがある。これらの埴輪は黒斑が見られ、野焼による焼成といえる。

今回調査された本古墳については、前述してきたとおりであり、径約33mの円墳と思われる。内部主体は墳丘のほとんどを富士川の支流の滝沢川の氾濫により削平されたため確認されていない。墳端部に僅かに遺存する葺石がみられるが周溝は確認されていない。埴輪は壺形埴輪があり、墳丘裾部をめぐっていたと考えられる。壺形埴輪は、二重口縁壺の形態で、外面ハケ、内面ナデによる調整が施されている。底部には焼成前の穿孔があり、すべて同一規格の壺形を呈している。

これらの築造年代は、副葬品などから銚子塚古墳、岡・銚子塚古墳は4世紀後半、丸山塚古墳、大師東丹保古墳は5世紀初頭と想定されている。

以上のように、本県の初現期の埴輪は、4世紀後半から5世紀初頭にかけて主要水系単位に出現している。その形態的、技法的特徴は、円筒埴輪ではおよそ川西編年第Ⅱ期に認定され、全国的に見ても古式の部類に入る様相を残している。すなわち、銚子塚古墳、岡・銚子塚古墳などの器台形円筒埴輪にみられる巴形、方形の透孔、外面2次調整タテハケ、突出度の強い断面M字形の突帯及び黒斑が認められる等の諸要素をもっていることである。これらと系譜的連繋をもつ群馬県朝子塚古墳や静岡県磐田市松林山古墳を含め、埴形、副葬品、埴輪等から東日本の古式古墳としては畿内の色彩の濃いと考えられるこれらの古墳へ、いちやく埴輪を樹立する背景には、畿内大和政権の大王権確立・伸長期の東海・中部・北関東への東国経営のための拠点確保政策の一端を察することもできよう。また、銚子塚古墳と岡・銚子塚古墳の酷似する円筒埴輪の樹立は、両被葬者の連合、及び畿内との関連を盆地内部に表示する上で有効な手だてであろうと考えられている。さらに、丸山古墳の円筒埴輪も、銚子塚古墳との主・従関係の中で樹立を認められたことと考えられている。壺形埴輪のみを配する例に関しては、大師東丹保古墳以後、継続性は認められず、5世紀初頭のこの時期のみに看取される

古式な特徴としてとらえられる。この埴輪受容期において、円筒埴輪を主体とする埴輪祭祀と壺形埴輪を主体とする埴輪祭祀の相違が何を反映するかが問題となるが、おそらくは首長の系譜あるいは畿内中枢部との関係における格差の反映ではないかと思われる。

3) 5世紀代（窖窯焼成技法の導入期）

本県においては川西編年Ⅲ期に認定される埴輪を樹立する古墳はいまだ知られていない。金川扇状地の扇端で、笛吹川左岸の自然堤防上に立地する亀甲塚古墳が5世紀前半に位置づけられるが、埴輪は存在していない。甲府盆地ではこの時期に一旦埴輪祭祀の途切れる現象があったことが指摘されている。これは首長墓の規模の縮小化とも合わせて、甲府盆地中枢の在地支配の危機感を露呈するものと考えられている。

5世紀中葉のブランクを経て、再び本県において埴輪が生産されるのは、この地に窖窯焼成の技術がもたらされる川西編年Ⅳ期段階である。この5世紀後半代の埴輪をもつ古墳としては、狐塚古墳、大塚古墳、王塚古墳、表門神社古墳が知られる。

狐塚古墳は、全長26mの帆立貝式古墳で、内部主体は明かではない。埴輪は普通円筒埴輪と形象埴輪と思われる破片がある。普通円筒埴輪は直径20～30cmのずん胴気味のもので、くずれ気味ではあるが概して台形に近く突出度の低い突帯と円形の透孔をもつものである。外面調整は一次タテハケ後、二次B種ヨコハケを施すものが多く認められる。焼成は良好であり、黒斑は認められない。形象埴輪は存在が推定されるだけで、形状は不明である。

大塚古墳は、全長約60mの帆立貝式古墳で、内部主体は後円部及び前方部に竪穴式石室があり、外部施設として葺石、埴輪が確認されている。埴輪は普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪が確認されている。円筒埴輪は、外面調整が一次ナメハケないシタテハケ後、二次B種ヨコハケを施している。内面調整はナデが多用される。突帯は突出度の低い断面三角形気味のもので多く、台形のものもはだれている。透孔は円孔もしくは楕円形であり、黒斑は確認されていない。形象埴輪には人物埴輪、器財埴輪が確認されているが、その形状を明らかにするまでには至っていない。

王塚古墳は、全長61.2mの帆立貝式古墳で、内部主体は竪穴式石室であり、県内唯一の合掌形石室である。埴輪は後円部墳丘上に樹立され、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪が確認されている。円筒埴輪は、外面調整が一次タテハケが主体を占め、僅かに二次B種ヨコハケが施されるものが認められる。また、一次ヘラナデもみられる。内面調整はタテハケないシハケが多用され、ヘラナデも見られる。突帯は断面三角形と台形があり、透孔は円孔もしくは楕円形である。焼成は良好で、黒斑は確認されていない。形象埴輪には人物埴輪、馬形埴輪が確認されているが、現存せず形状等は明らかになっていない。

表門神社古墳は、全長62mの帆立貝式古墳で、内部主体は竪穴式石室である。葺石、周溝については確認されていない。埴輪は普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪が確認されている。円筒埴輪は、外面調整が一次タテハケのみで二次B種ヨコハケは見られない。また一次ヘラナデも確認されている。内面調整はナデが主体で、ハケも部分的にみられる。突帯は突出度の低い台形に近いものであり、透孔は円孔と推定される。形象埴輪は蓋形埴輪、盾形埴輪、家形埴輪などが確認され、県内において最も豊富な種類をもつものである。

これらの古墳の年代は石室の形態、副葬品、埴輪等から5世紀後半から6世紀初頭に想定されている。この時期は本県における初期首長墓が形成された中道地域のほか、盆地縁辺部のほぼ全域に古墳の築造が拡散し、4世紀前葉から続いた中道首長層の地位が丸山塚古墳被葬者を最後に低下し、ここに大きな政治的変動がみられる。

川西編年Ⅲ期の埴輪をみない本県のⅣ期の埴輪の出現は、窖窯焼成という技術の受容とが期を一にしたことを示している。これは円筒埴輪の外面調整における二次B種ヨコハケ技法の採用が畿内の埴輪工人の関与をうかがわせ、人物埴輪、馬形埴輪等の形象埴輪の出現など、新たな埴輪祭祀を外部から受け入れた状況と対応するものである。本県では、この新来のB種ヨコハケの技法は狐塚古墳、大塚古墳、王塚古墳の3例を数えるに

過ぎず、5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる表門神社古墳では認められなくなり、広く普及することなく短命に終わり、6世紀以降では全く認められなく状況である。

4) 6世紀代（埴輪樹立の普及）

この時期の埴輪を樹立する古墳は、莊塚古墳、秋山熊野神社古墳、オエン塚古墳、加牟塚古墳、稻荷塚古墳が挙げられる。

莊塚古墳は、墳形、規模等は不明であり、内部主体は横穴式石室と推定される。埴輪は、普通円筒埴輪がみられる。外面調整は一次タテハケのみであり、二次調整を欠いている。突帯は低い台形であり、透孔は円形である。

秋山熊野神社古墳は、墳形等は不明である。埴輪は、普通円筒埴輪が見られる。外面調整は一次タテハケのみであり、二次調整を欠いている。突帯は低い台形であり、透孔は円形である。

オエン塚古墳は円墳である。本古墳出土と伝えられる埴輪として普通円筒埴輪がある。この埴輪の外面調整は一次タテハケを施し、突帯は断面台形がだれて三角形に近いもので、透孔は不明である。

加牟塚古墳は、径40mの大型の円墳で、内部主体は横穴式石室である。石室規模は姥塚古墳について本県2位の規模を誇る。墳丘は2段築成で、外部施設として葺石が認められ、埴輪の樹立が明かとなっている。埴輪は普通円筒埴輪、形象埴輪が確認されている。円筒埴輪は外面調整が一次タテハケを施し、突帯は断面台形を呈し、透孔は不明である。形象埴輪は大刀形埴輪、盾形埴輪、馬形埴輪等が確認されている。

これらの古墳の築造年代は、副葬品、埴輪等により莊塚古墳、秋山熊野神社古墳、オエン塚古墳は6世紀前葉に、加牟塚古墳は6世紀後半と想定されている。

6世紀前葉から中葉にかけては、初期横穴式石室が採用され、莊塚古墳、さらに加牟塚古墳、など新たな首長層が台頭し、埴輪もこれらの古墳に受容されていった。

以上のように、本県における6世紀代の埴輪には円筒埴輪と形象埴輪が確認されている。全体の形態のわかるものがなく、断片的な資料からの情報ではあるが、主な特徴としては、円形の透孔が主体となり、突帯は明確な二次調整が省略され、窖窯焼成によることがとらえられる。

5) 埴輪の消滅

本県における埴輪の終末は、6世紀末葉頃に位置づけられる。この終末期の埴輪の類例としては稻荷塚古墳があげられる。稻荷塚古墳は径20mほどの円墳で、内部主体は横穴式石室である。埴輪は形象埴輪が確認されているが、円筒埴輪は明かではない。形象埴輪は、人物埴輪の天冠部、顔面部、胸部、手部や鞍形埴輪などが見られる。これらの形象埴輪の造形は、東国のものとの類似性が指摘されている。6世紀中葉に埴輪祭祀が衰退した畿内の状況からも埴輪祭祀の変容が示唆される。

以上、埴輪の出現と展開について、おおまかに捉えてみた。今後は壺形埴輪を配する古墳の意義を追求し、位置づけを明確にすることで本県における古墳時代の政治過程の解明を行っていききたい。